青少年くらしき
家庭版
発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

5月

「明るい家庭づくり」作文

家庭の役割、家庭の在り方など、日頃から家庭について考えていることをテーマにした作文です。令和二年度は、小・中学校から一六四五点の応募がありました。各学年一点、倉敷市長表彰の優秀賞、各学年二点、優良賞が選考されました。優秀賞受賞者は二月二十八日の「倉敷市青少年健全育成推進大会」で表彰並びに本人による作文発表を行う予定でしたが、コロナ感染予防対応のため中止となりました。先月号に続き、優秀賞の中から二作品を紹介します。

一日、小さなお母さん

赤崎小学校　三年　山下　音葉

ある日曜日、お母さんは、朝の四時から起きて、お兄ちゃんの陸上きょうぎの大会に行くため、朝からごそごそと用意をしていました。わたしは、前日の夜から、おじいちゃんとパパは、出ちょうでいなくて、明日は、朝早くから、おばあちゃんが仕事の夜きん明けで帰るまで、家で一人でるす番をしないといけないことを言われていました。なんだか、ドキドキしていたので、いつも学校の休みの日は、起きる時間がおそいのですが、いつもより早く目が覚めました。お母さんは忙しそうに用意をしていて、とても大変そうでした。わたしは、

「何かお手伝いしようか？」

と言ったらお母さんは、

「だいじょうぶ。」

と言いました。だけど、わたしは、お母さんとお兄ちゃんが家を出たあとに、おばあちゃんも仕事からつかれて帰ってくるし、家族の役に立ちたかったので、きょうは、一日お母さんになろうと思いました。

まずは、食器の洗い物をゴム手ぶくろをつけて、洗ざいをつけたスポンジでていねいに洗い、洗い終わった食器を布でふきとって、ピカピカにしました。

次は、一階の部屋全部にそうじきをかけてゴミをとって、前日の夜にお母さんがほしていた洗たく物が、かわいていたので、きれいにたたみました。

その時、おばあちゃんが帰ってきて、きれいになっている部屋を見て、

「音ちゃん、ありがとう。おばあちゃん、たすかったわあ。」

と言ってよろこんでくれました。もっとよろこばせたかったので、わたしはコーヒーをつくってあげて、三十分マッサージをしてあげました。とってもよろこんでくれました。

そしてお母さんと、お兄ちゃんが帰ってきた時に、お手伝いをほうこくしたら、すごくほめてくれました。わたしは、心の中がほわほわして、あったかい気持ちになりました。

お母さんもつかれて帰ってきていたので、コーヒーを作ってあげて、夜ごはんのじゅんびのやさいを切ったり、食器を洗ったり、ごはんをはこんだり、おふろのそうじをしたりして、一日たくさんのお手伝いをしました。

エプロンをつけてるわたしを見て、おばあちゃんとお母さんに、

「小さいお母さんみたい。」

と言われました。

今日、一日たくさんのお手伝いをして、お母さんやおばあちゃんの大変さがわかりました。いっぱいほめてもらえたことと、家ぞくの役に立てたことがとてもうれしかったので、これからもたくさんお手伝いをしてあげたいと思います。

いつも仕事しながら、家のことをしてくれる、お母さんとおばあちゃんありがとう。

『スーパーマン、婆ちゃん』

船穂中学校　一年　岩崎　正宗

ぼくには、お婆ちゃんがいる。一緒には、暮らしていないが、ぼくの家から歩いて三十秒のところに住んでいる。ぼくのお父さんとお母さんが共働きで、毎日朝が早く、帰ってくるのが遅いため、今は、一日の半分を婆ちゃん家ですごしている。なのでぼくは、根っからの婆ちゃん子になるわけだ。だからといって、この生活に不満があるわけではない。

ぼくは生まれて五ヶ月から保育園に通っている。お母さんの仕事先から近い保育園で、朝七時半から夕方六時まで、約五年ちょっと、この生活をしてきた。なので小さい頃のぼくは、保育園のことを仕事と呼んでいた。その後、小学校二年生までは、学童保育に行っていた。帰ってきても行くところがないから、しょうがなく、通っていた。ぼくは、ずっとこの生活が続くのかなと思っていたが、ここで、スーパーマン婆ちゃんが登場する。

婆ちゃんは、ぼくが小学校二年生の頃まで、小学校の先生をしていた。だが、定年で、小学校を退職することになり、ぼくに、

「学童やめていいよ。」

と言ってくれた。まさに、ぼくにとって婆様、神様、仏様。これでようやく、みんなと同じような生活を送れるようになる。ぼくは本当にうれしかった。

しかし、ぼくは、とんでもないかん違いをしていた。母さんから、婆ちゃんの話をよく聞いていた。むちゃくちゃこわいと。でも、心の中で、そんなことあるかい！と思っていた。

だって遊びに行くと、お菓子を出してくれたり、一緒に公園へ行って遊んでくれたり、すごくやさしかったからだ。大げさに母さんが言っているだけだと思っていた。

しかし、今は思う。母さんの言っていたことは、大正解であったと。一度、おこりだすと止まらない。しかも、言い方が先生みたいで、家にいるのに学校にいるかのように思えてきて、『すみませんでした。』と言いたくなる。そして、宿題のやり直しを何回もさせられる。学童の先生が、仏様のように思えてくる。とはいえ、それは自分が悪いのだけれど。

でも、おやつを用意してくれたり、毎日の給食のこんだてを見ながら、夕飯の準備もしてくれる。みんなの体のことを考えて、味つけも薄めで、ぼくの口は、かなりこえたと思う。休みの日に、お母さんが作ってくれるご飯より、ぼくは、婆ちゃんが作ってくれたご飯の方が、おいしいと思う。大きな声では言えないけれど。

そして、何より婆ちゃんが、すごいなぁと思うのは、ぼくが、

「ノートが少なくなってきた。」

とか、

「今度、折り紙がいる。」

と何気なく言った言葉を覚えていて、次の日には、用意してくれているところだ。まさにスーパーマン。ぼくだけじゃなく、弟の勉強や、いとこの勉強も見ないといけないのに、ぼくが習っている勉強のワークを一緒に復習してくれたり、ほんとうにすごすぎると思う。家で、ゆっくりしたいはずなのに、毎日、朝から夜まで、ずっと動いている婆ちゃん。

ぼくは、時々、心配になる。あんなに動いていて、倒れたりしないかな？と。心配で母さんに、

「大丈夫かな？」

と言うと、母さんは、

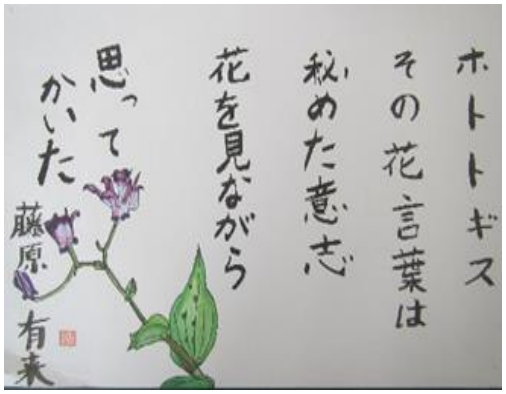
「お婆ちゃんは、止まったら死ぬけんな。動いとる方がいいんよ。」

と笑いながら答えが返ってきた。確かに、常に動いているように思える。止まったら死ぬのか…。

母さん、そんなことはないよ。今、婆ちゃんがハマっているのが、韓国ドラマ。この時ばかりは、止まっている。そして、すごく静かだ。朝ドラと韓ドラを邪魔すると、婆ちゃんの雷が落ちるから、だれもしない。その間はみんな宿題を黙々とやる時間。これは暗黙の了解。みんな守っている。

婆ちゃんといるといつも、色々なことが起こるので、ぼくは大好きだ。理科の実験も、工作も思いっきりやらせてくれる。必ず、片付けまでするという約束だけど。いろいろな体験もさせてくれて、料理を作ったりもさせてくれる。父さんや母さんがいない時間、ぼくたちが寂しい思いをしないで良いように、ずっと、小言を言いながらも、ぼくたちと一緒にいてくれる。そんな婆ちゃんが、ぼくは大好きだ。これからも、けんかをしながらも、ずっとそばでぼくたちのことを見守っていてね。

また、コロナが落ちついたら、イオンに、コーヒーもらいに行こうね。無料のね。



「ほととぎす」クロッキー
倉敷市立琴浦北小学校５年　藤原　有来（令和２年度）
家にほととぎすがさいていて、きれいだと思って描きました。花言葉を調べて、なるほどと思ったら、自然に短歌がうかんできました。